

【第133回生涯教育講座】

地域医療の現場における出血性脳梗塞の臨床像

やま	がた	しん	ご ¹⁾	おか	だ	かず	のり ²⁾	たけ	だ	ふみ	のり ³⁾
山	形	真	吾 ¹⁾	岡	田	和	悟 ²⁾	武	田	文	徳 ³⁾
はま	ぐち	しゅん	いち ¹⁾	たか	はし	のぶ	ゆき ¹⁾	き	じま	つね	たか ¹⁾
濱	口	俊	一 ¹⁾	高	橋	伸	幸 ¹⁾	木	島	庸	貴 ¹⁾
やま	ぐち	みね	かず ¹⁾	ほん	だ	さとし	聡 ¹⁾	まき	いし	てつ	や ⁴⁾
山	口	峰	一 ¹⁾	本	田			牧	石	徹	也 ⁴⁾

キーワード：出血性脳梗塞/出血性変化，進行性脳梗塞，地域医療

要 旨

県央地域のの中核病院である大田市立病院において，平成18年から令和3年までの過去16年間に虚血性脳血管障害のために入院した症例は2,005例あり，そのうち出血性梗塞を呈した138例について，その臨床像を第一期8年間及び第二期8年間に分けて検討した。脳梗塞の病型は，心原性脳塞栓によるものが最も多く6，7割を，アテローム血栓性梗塞によるものが約3割を占め，圧排効果を有する血腫を呈する症例のほとんどは心原性脳塞栓によるものであった。第一期の分析では，出血性移行は，発症2日以内に約半数，発症から6～9日に約2割の例が生じており，発生時期は2峰性の分布をとった。前半第一期に比べ，後半第二期において，出血性変化はより軽度を示すものが多くを占め，治療法の変化を含めた背景因子の関わりが推察された。

はじめに

出血性梗塞は虚血発作後に生じた出血性変化であり，経過中に生じた出血性変化によってはその後の治療の変更を余儀なくされることも少なくない。また，直接作用型経口抗凝固薬（direct oral anticoagulant: DOAC）の普及により，ワーファ

リンに比して高度の頭蓋内出血例の減少している可能性が示される一方¹⁾，血栓溶解や機械的血栓回収などの再灌流療法の実施に伴い出血性梗塞化の頻度は上昇すると言われている。また，人口高齢化による心房細動の有病率の高まりのため，心原性脳塞栓の増加も推察される。大田市立病院は県央二次医療圏にある中規模病院で，現在は，療養，感染症病床を含む229床で運営されている。脳梗塞の診療をとりまく情勢も変化中，自院の受療統計を見直し，出血性梗塞の臨床像について検討した。広大な中山間地を抱える過疎的地域に立地する中核病院という位置付けの施設におい

Shingo YAMAGATA et al.

1) 島根大学医学部大田総合医育成センター

2) 大田シルバークリニック

3) 大田市立病院内科

4) 島根大学医学部総合医療学講座

連絡先：〒694-0063 島根県大田市大田町吉永1428-3

島根大学医学部大田総合医育成センター